

藤井克徳（著）

見えないけれど観えるもの

藤谷順子（国立国際医療研究センター病院リハビリテーション科）

実に魅力的な題である。著者の藤井克徳氏は、自らの視力を踏まえて「見えないけれど」と謙遜しておられるが、「見えても観えていない」者としては、どうすれば観えるようになるのか、知りたくてついつい手にしてしまう。

藤井氏は、現在きょうされん常務理事、日本障害者協議会常務理事、日本障害フォーラム幹事会議長などをなさっておられる日本の障害者運動のリーダーのお一人である。本書では、都立小平養護学校教諭時代に学校外での障害者の生活の諸問題を調査し、もっとも要望の強かった「働きたい」というニーズに応えるために作業所を作り、そして専従するようになった経緯、その後のさまざまな運動の諸断面が、1990年代半ばから2000年代初頭の、主にきょうされんの月刊広報誌のコラム欄原稿を中心にまとめられている。

それぞれは、コラムまたはエッセイ風の小品ばかりで、読みやすいのだが中身は濃いのである。読みやすさは、それぞれの文章が、藤井氏が大切にしておられるきょうされん月刊誌読者に向けて書かれているからであろう。とはいえ、それぞれの文章にはたいてい、説得力のある数字が含まれており、また、制度や法律についてのわかりやすい解説となっている。医療という業界に身を置く者にとってはいっぺんに視野が広がるばかりではなく、わが国における人為的な不幸を放置したままでよいのかと、背中を押されるような感がある。

筋金入りの運動を実践している藤井氏の著作なだけに、『「無かったら創ろうよ」の作業所魂』、『運動の神様の3つの掟『あきらめないこと、ぶれないこと、媚びないこと』』や、『コツコツドカンの重要性（コツコツと続けることと、時として思い切って行動したり新しい手法を用いることの併用）』、『エネルギー

不滅の法則（費やしたエネルギーはいつか形を変えて結実する）』などたくさんの名言が随所にみられる。役所との不毛な交渉経緯の報告や不本意な制度の制定に際しての文でも、愚痴や諦めではなく強靱なりベンジ宣言になっている。雑誌の発刊当時、この文章に勇気づけられた方々が多かったに違いない。

藤井氏のパワーは長年の運動の実践、特に事実を積み上げた数字を示し続けてきたことによって培われてきたと思われるが、それをさらに補充しているのが、国際会議や、国内の実践者との交流である（第7・8章）。真摯に生きてこられたからこそ、素晴らしい人々との出会いもあるであろう。読者にとっては間接的にさまざまな方の警咳に接することができ、ありがたいお裾分けである。

難しい言葉を多く連ねていても空疎な文章は存在する。一方で、やさしい言葉で短くても力のある文章は存在することがよくわかる。そして「文は人なり」という言葉が思い起こされる書籍である。

なお、きょうされんを構成する小規模作業所は、多くの実績をもちながら、法定外施設であるために、阪神大震災のあとの復興策では不十分な対応を受けてきた（『障害者を締め出す復興策はもろく弱い』本書83～85頁）ことも述べられている。そしていま、東日本大震災である。藤井氏はじめ、きょうされんの関係者諸兄は、被災した障害者や作業所の支援に大きな努力を払っておられることと拝察する。きょうされんホームページでは、対策本部と支援基金窓口（郵便振替口座：00100-7-86225）も立ち上げていることを「総合リハ」読者にご紹介しておきたい。

（A5判 258頁 定価2,100円（税込） やどかり出版刊 2010）